翻訳と注解 1513年4月21日付F ・ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛書簡

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石黒, 盛久, ISHIGURO, Morihisa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058242

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

翻訳と注解　1513年4月21日付F・ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛書簡

石黒　盛久

Translation and Notes, F. Vettori's letter to N. Machiavelli, 21 April 1513

Morihisa ISHIGURO

解題

以下の翻訳・注解により紹介するのは、16世紀初頭イタリアの都市国家フィレンツェで活躍した政治家・外交官フランチェスコ・ヴェットーリが、友人ニッコロ・マキアヴェッリに宛て認めた、1513年4月21日付の私的書簡である。マキアヴェッリの代表的著作が『君主論』であることは周知のことであるが、『君主論』誕生を語るあたり必ず言及されるのが、その脱稿を報告する1513年12月10日付のマキアヴェッリによるヴェットーリ宛書簡に他ならない。時にイタリア文学史上最も美しい手紙と評されるこの手紙は、末尾の日付の記入によりその執筆日時が明らかであることから、『君主論』そのものの執筆時期の同定という文献学的研究の根本史料ともされてきた。またこの書簡は、『君主論』執筆に至るマキアヴェッリの意図や、かかる意図の背景となる生活を探る上でも不可欠の素材でもある。

だがこの1513年12月10日書簡は決してそれだけで完結した作品ではない。この手紙に対し、12月19日付の書簡によりヴェットーリが返信を認めているように、12月10日付書簡はこの二人の人物間の発信と返信の相互過程の一齣として理解されるべき作品である。両者の往復書簡を通じた交流の一連の過程は、今日残っているものだけを勘案しても、F・ガエタの編になる近代校訂版で43通に上っている[1]。ガエタのマキアヴェッリ書簡集にはこの4通を含む総計238通のマキアヴェッリ発／宛の書簡が集録されている。これらの私的な書簡と別にして語られる公務書簡の数の膨大さから見て、私的書簡もまた実際には238通を遙かに超える分量が執筆されたと考えられる[2]。だが自身発／宛の書簡を自己の創作活動の一部として、その公刊を念頭に念入りに保管した当時の文人達の慣習とは異なり、実務官僚出身のマキアヴェッリは自身発／宛の書簡の公開の意志を有しておらず、その大半が読了後破棄されてしまったようだ。このような状況を前提にした時、43通もの私的往復書簡が一括して現存していることは異例であり、この異例の背景にマキアヴェッリがヴェットーリと交わしたこれらの往復書簡を、一連のものとして了解しこれを意図的に保存していた

[1] このような往復書簡が必要とされたのは、往復書簡の相手であるヴェットーリが教皇庁駐在フィレンツェ大使として、ローマに滞在していたからである。もし彼がフィレンツェに居住していたのなら、今回翻訳した4月21日付書簡中に「ヴェッキオ橋からバルディ通りを経てカステッロまで長々の道のりを、一緒に散歩」するとあるように、両者は手紙を介さず直接対面で交流していたはずである。実際この一連の書簡の往復の終結の契機は、1515年ヴェットーリがフィレンツェに帰任したからだと考えられる。

[2] これらの私的書簡の編集の起点は祖父の生涯と業績を顕彰すべく行われた、マキアヴェッリの外孫ジュリアーノ・リッチによるマキアヴェッリの手稿の収集作業にある。

令和元年10月1日受理

ことが想定される。

こうした保存にマキアヴェッリ自身の如何なる意図があったかの解明は、今後の研究に待たねばならないが、これら43通の書簡が、官僚としてのキャリアからの転落と『君主論』の執筆を通じた文人としての再生という、マキアヴェッリの生涯の心理的変成過程を証言することにより、その思想の分析の極めて重要な素材となることは確かである。例えばJ. M. Najemyの *Between Friends: Discourses of Power and Desire in the Machiavelli- Vettori Letters of 1513-1515*, Princeton, 1993はこれらの往復書簡による議論の成熟が、マキアヴェッリの文人としての転生にいかに作用したかを論じた画期的著作である。

とはいえマキアヴェッリの書簡研究は、他の諸作品の研究と比べても未だ十分に展開されていない分野である。ほとんど手つかずのままに残されている使節書簡の領域はもとより、今に残る238通の私的書簡についても、その一部が主要著作との連関の観点から、部分的かつ散発的に考察されているに過ぎない。そのことは私的書簡の中核をなす43通のマキアヴェッリ－ヴェットーリ往復書簡についてすら、マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡のみが英訳や日本語訳の対象とされてきた点にも窺われる。だが往復書簡とは、キケロも言うように眼前せぬ相手との対話であり、従って一方の側（目下の話題に関してはマキアヴェッリ）の意図は、他方の側（この場合ヴェットーリ）の意図との相互作用を通じてのみ正しく理解される。

そうした観点から訳者は先般より、G. Ingleseによる校訂版(N. Machiavelli (a cura di G. Inglese), Lettere a Francesco Vettori e a Francesco Guicciardini, Milano, 1989)を底本に、先にも言及したガエタ版(N. Machiavelli (a cura di F. Gaeta), Lettere, Milano, 1981 (2 ed.))をも参看しつつ、この43通の往復書簡の相方であるヴェットーリの一連の書簡につき、翻訳・注解に着手した。本訳稿冒頭に掲げた第8書簡という数字はイングレーゼ版書簡集の目次に掲載された通し番号を用いている。この第8書簡に先行する7通の書簡の翻訳は、『世界史研究論叢』9号に掲載予定であるので、関心のある向きは併せて参照されたい。

【翻訳と注解】

第8書簡

フランチェスコ・ヴェットーリからマキアヴェッリへ

ローマ　1513年4月21日

盛名嚇々たる士　ニコラウス・マキアヴェリス殿

今朝は早くに目覚めた。そして目覚めるとすぐに、所得税[3]として僕たち兄弟に課せられた4フィオリーノと、同じくベルナルド[4]に課せられた4フィオリーノは、課税額として過大なのではないかと思い始めた。他のいっそう金持ちである連中の課税額がもっと少ない額であるということを考えると、そのように思えてならない。自分の身の上のことを考えるにつけ、この点でますます得心が行かなくなってしまったよ。僕はどんな類の商売にも携わっていないし、生きていくのがやっとという程の稼ぎしかない。公職にあってもそこから如何なる利益を引き出そうと画策したこともない。その上、婚資を用立てやらなくちゃならない娘たちまでいるんだ。僕は衣服やその他の事柄に見栄を張ったこともないし、それどころかそうしたことについてはむしろ慎ましい方だ。だが慎ましく生活することで僕が金を貯めようとしているからといって、誰も僕のことをけちん坊だとは言わせないよ。だって僕の側に支払いの義務を負う何かの負債があるときに、君の側から僕に支払いを督

[3] 原語 arbitorio。納税者各人の所得をもとに税務当局が課税額を年毎に査定した。

[4] ベルナルド・ヴェットーリはフランチェスコの叔父。

促させないようにしたいと心がけているんだからね[5]。またもし何かを購入しなければならないときには、僕はそれをいつも他の人たち以上に買い求めるようにもしている[6]。政府役人が僕の一家にこんな過重な課税の割り付けを行なうのも、ベルナルドが金持ちで子供がいないからだとか、僕たち兄弟に関わる一件によるものだとか言われているようだ。それならそれで結構だ。もし彼らがそんな思いこみに囚われているなら、いくらでも税金を押しつけてくるがいい。僕は公私の両面においても、行動によっても言葉によっても誰を害することもなかったし、税務当局の役人たちに対し深い信頼の念をも抱いている。だからどんな事についても彼らの判断に従うように心掛けている。

さて僕は次のように考えている。即ち、一方ではパオロがソデリーニ大統領を成功裏に政庁舎から追い出したことが[7]、他方で僕が自分に可能な限り前大統領に救いの手をさしのべたことが[8]、僕たち兄弟の双方に災いをもたらすことになったのだと。というのも、政権の崩壊によって真実が暴露されることを恐れるソデリーニ政権の支援者のたちの全てが、パオロに対して反感を抱いているし、メディチ家の新政権の味方に馳せ参じた人々は、もしピエロ・ソデリーニが［政権崩壊時に］死んでしまっていたなら、彼らに如何なる心配の種も残らなかったことだろうにと思うことから、僕に反感を抱いているのさ。このようなことを踏まえて僕は、この不快な事柄から気持ちを逸らすために、課税に関してもまたその他のことに関しても僕が不当に取り扱われていると、あえてはっきり君に言ったわけだ。

そんなことよりもむしろ、次の二つの疑問を手がかりに、この数日間に次々と巻き起こったにもかかわらず、僕の頭では十分にその経緯を解きほぐすことができない、世情の転変や条約の締結、休戦の受容といった事柄に話題を転じようじゃないか。議論の出発点となる二つの疑問とは第一には、ヴェネツィア人たちは次のことを条件にフランスと約定を結んだのだろうか、ということだ[9]。即ち、彼らが5月半ばまでに［フランス軍に加勢するために］重騎兵1000騎、軽騎兵1200騎、歩兵10000人を編成する一方、同じ頃までにフランス王[10]はミラノ公国を攻撃すべく、騎兵1000騎と歩兵10000人を繰り出すのか。そしてまたもしミラノ公国が征服され、それがフランス領となった時、その代わりにヴェネツィア人たちがブレッシア、クレマ、ベルガモそしてクレモナの代わりにマントヴァを手に入れることになるのかとどうかいうこと。第二には、二ヶ月以内にイギリス王[11]と皇帝[12]がそれに同調する事になるとスペイン王が彼に約束したことが原因となって、フランス王[13]はスペイン王[14]と向こう一カ年間の休戦条約を、アルプスの彼方に関して結んだのか否かということだ。

もし条約や休戦の話が間違いないものであるならば、スペイン王の思惑が如何なるものか論

[5] 先立つ4月16日付の書簡においてマキアヴェッリが、彼からの借金を返そうとしない債務者につき苦情を記したことに対応した一句である。

[6] 文脈から見てとりわけ、政府が富裕層に購入を課した強制国債の購入を示唆しているように考えられる。。

[7] フランチェスコの兄弟パオロ・ヴェットーリは亡命中のメディチ家と連携し、1512年8月31日に生じたソデリーニ終身大統領政権打倒の中心人物となった。

[8] 兄弟パオロの行動とは対照的にソデリーニ政権崩壊時、マキアヴェッリの要請を受けたフランチェスコ・ヴェットーリは、失脚した大統領ソデリーニを庇護し彼の亡命先シエナまで同行している。ソデリーニ政権崩壊時のヴェットーリ兄弟の言動については、本書簡に先立つ1512年4月19日のF・ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛書簡にも言及されている。

[9] 1513年5月23日に締結されたフランスーヴェネツィア間のブロア協定のことを示唆している。事実この協定に従い5月下旬、フランス軍とヴェネツィア軍はロンバルティアへの侵攻を開始し、一旦はミラノの占領に成功している。

[10] このフランスースペイン休戦の可能性は、1513年6月6日のノヴァラの戦いにおけるスイス軍に対するフランス軍の大敗により雲散霧消したと考えられる。

[11] ヘンリー8世。

[12] マクシミリアン2世。

[13] ルイ12世。

[14] フェルナンド2世。

議を交わすために、君とヴェッキオ橋からバルディ通りを経てカステッロまで長い道のりを、一緒に散歩したいものだよ。なぜなら思うにこの件は僕に言わせれば、むしろフランスに利があることは明らかだと思うからだ。同様に、なぜフランス人との約定に及んだのか、その意図が読み切れないということは、[カンブレー戦争による敗北の結果] 本来の領域に押し込められているヴェネツィア人についても言えるだろう。つまりはミラノ公国をめぐるこの作戦において、フランス王は勝利をおさめるかも知れないし、そうでないかも知れない。彼がもし敗北を喫したなら、[同盟者たる] ヴェネツィア人たちもまた彼と共倒れになってしまうことだろう。他方もしフランス王が勝利をおさめその強大さを維持したとしても、以前彼が彼らに対し自身が交わした約束を守らなかったのと同じように、今回もまた同じようにするかもしれない。このような見解に対して、次のように答えることができよう。即ち、もしフランス王が敗北したならヴェネツィア人達は、彼らが敗北した際に常にそうしているように、最終防衛ラインとしてパドヴァとトレヴィーゾを死守しようとするだろう。そしてそのことに彼らは成功するように思われる。他方フランス王が勝利をおさめた場合、彼はとりあえずヴェネツィア人たちとの [領土分割の] 約定を守ろうとするだろうが、もし彼がそうしようとしない場合には同様に、ヴェネツィア人たちはせめてパドヴァとトレヴィーゾだけでも守りきろうとするに違いないと。これに加えて次のように言うことも可能だ。こうした事態に陥ったあげくヴェネツィア人たちは軍事的に消耗してしまい、我々の俗諺に言うところの、結核病患者のような死に様を迎えてしまうのではないだろうか。彼らのように自身が強大であることに慣れきっている者たちは、当然ながら自分の勢力が失墜するようなことは望まない。そこでかつての勢力を取り戻すため、こんな連中は大博打に打って出るものなのだ。こうしたやり方をすれば、失った領土や栄誉、名声を短期間に取り戻せるかも知れないと考えるからだ。実際にヴェネツィア人たちはアニャデッロでの敗戦以来すでに三年間も[15]、こうした熱病にとりつかれた果てに、いまや滅亡の淵へと転がり落ちつつある。そしてもしフランス王が彼らヴェネツィア人にした約束など意に介さぬほど強大になったなら、ヴェネツィア人たちはフランス勢を、更にイタリアに引き込もうとするんじゃないだろうか。というのも自分たちだけでなく、イタリア全体が [フランス王への屈従という] このような状態に追い込まれることの方が、彼らにとってはまだしものことだろうから。

だがここで話をスペイン王の言動の考察に戻すことにしよう。彼はパンプローナを敵 [フランス軍] の攻撃から守り張り通し、ナヴァラ王国全土を征服した[16]。その結果彼は己がフランス人より強勢であることを、勝ち誇ることができた。そして彼はこんどは彼自身の言によれば、フランスが [自らの支配下にある] ナポリ王国を、そしてあげくの果てにはイタリア全土を攻め取るのではないかとの疑念から、フランス人に対しスイス傭兵軍の支援もないままに、イタリアで戦争を仕掛けることとなった[17]。ところが今になってスペイン王は急転直下、彼にとり不利な条件であることを承知の上で、フランス王との講和をあえて結ぼうとしている。こんな

[15] アニャデッロの戦い(1509 年 5 月 14 日)はヴェネツィア共和国と教皇ユリウス 2 世の提唱になる神聖同盟軍との間に交わされた、カンブレー戦争(1508-1510)の帰趨を決定した戦い。この戦いの敗北により防衛線を全面的に崩壊させたヴェネツィア共和国は、「800 年かけて苦心惨憺して手に入れたものを、わずか一日のうちに失った」(『君主論』第 12 章)。

[16] スペイン王フェルナンド 2 世は 1512 年、イベリア半島北東部のナヴァラ王国に侵攻、フランス系の国王ジャン・ダルブレを追放し、同国をスペインに併合した。

[17] フェルナンド 2 世に派遣されイタリアで活動したラモン・デ・カルドナ麾下のスペイン軍団の活動のこと。特に 1512 年 4 月 11 日のラヴェンナの戦いにおけるフランス軍に対する勝利は、スペインによるイタリア支配の始点である。

拙いやり方をしているにもかかわらず彼は、世の中から外交上手の狡猾の士であると見なされている[18]。そして我々のもとに届けられる僅かの書簡や不確かな情報だけでは、目下のところ彼が優勢なのか劣勢なのかさっぱりわからない。

とりあえずは、もし彼［スペイン王］が優勢だとするならば、自身に有利な条件を突きつけることができる間際まで相手［フランス王］を追い詰めているにもかかわらず、休戦によりわざわざ敵を再び強大化させるようなことをするはずがない。他方彼が劣勢に立っているとするなら、彼は戦争を継続することができず、イギリス王と皇帝の支援が得られない結果、何事につけフランス王と協調しなければならなくなったはずだ。その結果、スペイン王はフランス王に対して、彼が軍事力を用いて占拠している、つまりは手中に収めているミラノ公国を引き渡す羽目になったに違いない。

他方フランス王はスペイン王からの譲歩を通じてこの地を獲得したならば、［ミラノ公国獲得のため］ヴェネツィア人と協約を結ぶ必要はなかっただろう。そればかりじゃない。イタリアの他の地方に勢威を及ぼすためにロンバルティアに軍を進める必要も、そのために多大の出費を行う必要もなかったはずだ。更に付け加えれば［イタリアにおいて］それ以上勢力を拡張しないと、彼ら［ヴェネツィア人たち］に約束する必要もなかったことだろう。だがこのようにしてフランス王がイタリアに軍を進め、一国［ミラノ公国］を征服し、勝利のあげく傲慢になり、彼［スペイン王］に対して恩義を感じるどころか、己が味わった昔日の屈辱を想起したならどうなるだろう。フランス王はスペイン王に対し猜疑心を抱くようになり、休戦を終了したあげく報復のために後者を攻撃し始め、後者の領地の内まずはナポリ王国を、続いてはカスティリア王国を彼から奪取しようとするのではないだろうか。

ある者は次のように言うかも知れない－スペイン王はこの度の戦争で、長らく渇望していたナヴァラ王国領を獲得した。その地の獲得により彼はスペインの全土を安泰にすることができるようになったのだ。それが欠けていたばかりにこれまで彼は、もしこの地をフランス人が併合したなら、彼らが自分に容易に襲いかかってくるのではないかと、日夜頭を悩ませていたのである。ところが今回のこの地のスペイン王による併呑により、逆にフランス人たちの方が、スペイン王の側からその望むがままにフランスに対して攻勢を仕掛けてくるのではないかと、懸念し始めるようになった。

またスペイン王が一軍をフランス方面に、また別の一軍をイタリア方面に配置する支出に耐え得るほど強大ではないということを勘定に入れるなら、彼にとって肝要なこととは、イタリア方面における自軍をより強大ならしめるために、この二つの支出を一つにまとめることだということになる。そればかりではない。ミラノ公やスイス人たちそして教皇とその隷属者たちは、もしフランスがロンバルティアにおいて勝ち誇るようになった場合、彼らが直面することになる苦難を念頭に、各々の軍事力や資金を提供することによって、こぞってスペイン軍を支援することになるだろう。かくしてフランスは一敗地にまみれる屈辱を味わい、逆にこのようにやり方を通じてスペイン王はナヴァラの占領を確実なものとすると共に、フランス王からなにがしかの譲歩の約束を引き出すことができるであろう－と。

もしカトリック王自身がこのように考えているとするならば、彼のことをこれまでそう考えていたように賢明な男とは、もはや考えるわけにはいかないと、僕は君に告白せざるを得ない。なぜなら昨年彼が味わった経験からも[19]、彼の

[18] フェルナンド2世の政略については『君主論』第21章に触れられている。

[19] 先述ラヴェンナの戦いのこと。当初スペイン軍はガストン・ド・フォア指揮下のフランス軍に圧倒されていたが、フォアの不慮の戦死により奇跡的勝利をおさ

軍隊がフランス軍と正面切った合戦を展開し得ないことは、彼もよく心得ているはずだからだ。ましてや実際そうであるように、金の力でフランス軍がドイツ歩兵を自軍に雇い入れている場合にはなおさらだ。また彼は次のようなことも配慮しておくべきだろう。即ち、ミラノ公国はスイス人どもやまたスペイン王自身の手の者たちによって、乱暴狼藉の限りを尽くされ、焼き討ちに遭い、収奪されまくってしまっているということをだ。だから彼としてはこの地においては、彼に対する人々の不満が充ち満ちており、支配者の交代が切に望まれていると言うことを、心に留めておかねばならないはずなのだ。

またスペイン王はミラノ公国においては、いま述べたような理由から資金を僅かしか調達できないし、[彼に従属する] ミラノの公爵が未だ若年でかつ近年その地位に就いたばかりで非常に弱い立場にあるため[20]、資金を徴集して王に提供することができないということも、知っておかねばならない。スイス人はといえば、彼らは金を手に入れない限り決して動こうとはしないだろう。教皇やその他の同盟者たちについて言えば、スペイン王とフランス王の間の休戦条約の成立を知って、それがなぜ結ばれたのかわからないままに彼らは麻痺状態に陥ってしまい、スペイン王に対し不信の念を抱き、早晩フランス王と何らかの協約を求め始めることになるだろうし、ヴェネツィア人たちもロンバルティア地方を、彼らの戦線から攻撃し始めることだろう。

ミラノの地にあっても堅固な要塞がフランス勢によって依然維持されている[21]。ジェノヴァは不平の念を抱いたままだ。そのため、いったんフランスがその攻勢をイタリア方面へと向け直せば、スペイン軍は直ちに動乱へと対処せざるを得なくなるばかりか、ロンバルティアの全ての地はたちどころに造反に立ち上がり、新公爵は逃亡を余儀なくされるに違いあるまい。また皇帝がヴェネツィア人を容易に統御できようとも思われない。なぜなら、その賢明さで知られたスペイン王のみならず他の蒙昧な連中でさえ、皇帝陛下が何をなさることができるのか十分承知の上だと見てとれるからだ[22]。

ともあれ我が友よ。[仏西休戦成立という] この一件には未だ知られていな何かが、隠されているのかも知れない。僕はこの裏に何が隠されているのか詮索し過ぎて、いつもより二時間も余分に寝床の上にいることになってしまったよ。だがそれにもかかわらず確かな結論に達することができないのだ。僕に手紙を書いて、こんな状態から僕を救い出してくれ。そして何か君に思い当たる節があったら、この休戦に関するスペイン王の思惑が如何なるものなのか、君の意見を伝えて欲しい。そうしてくれれば僕は君の判断に、全面的に同意することだろう。なぜならお世辞抜きのところを言わせてもらえば、この件について言葉を交わした他の如何なる人の意見よりも、君の意見の方が確かなものだったからだ。君の意見に僕は全幅の信頼を置いている。

フランチェスコ・ヴェットーリ
ローマ駐在大使
１５１３年４月２１日

面倒なのでこの手紙については写しを取っておかなかった。君がこの手紙を十分理解してしまうほど、深く読み込んでくれるものと思っている。

めた。スペイン歩兵がフランス騎兵に対し脆弱であることについては、『君主論』第26章に分析がある。

[20] ミラノ公マッシミリアーノ・スフォルツァ(1493-1530)のこと。1512年から1515年にかけてミラノ公位にあったが、実際には同地を占領するスイス傭兵軍やスペイン王の傀儡であった。

[21] ミラノのスフォルツァ城やクレモナの要塞のこと。ロンバルティア全域がスイス傭兵軍とスペイン軍の支配下に置かれたにもかかわらず、これらの要塞は以前フランス軍の手中にあった。

[22] マクシミリアン2世の優柔不断な性格については『君主論』第23章を見よ。